２１世紀の日本のかたち（５５）

―ロンドンオリンピックにみる国のかたち―

戸沼幸市
＜(一財)日本開発構想研究所 代表理事＞

１．ロンドンオリンピック

2012年夏のロンドンオリンピックの舞台設定は、構築的なはっきりとしたコンセプトを持ったいかにもイギリスらしいやり方でした。

７月27日のオリンピック・メインスタジアムでの開会式を生中継で見ましたが、幕開けはさながら英国史を凝縮した演劇の舞台でした。英国の伝統的な田園風景が再現され、正面の舞台に小高い田園の丘が築かれておりました。

のんびりとしたイギリスの田園風景の会場の中に、突然ニョキニョキと工場の煙突が立ち上ってきました。産業革命です。近代世界の栄光と苦悩の始まりです。これに重ねてイギリスらしいパフォーマンスが繰り広げられました。

そして、丸形劇場８万人の大観衆が見守る中、204の国・地域からギリシャを先頭に各国選手団が次々に入場してきました。日本の旗手はアテネと北京の両オリンピック女子レスリング金メダリスト吉田沙保里、ジャマイカはウサイン・ボルトが旗手となって入場してきました。各国選手代表の掲げてきた国旗が一本ずつ田園の丘にさされてゆく風景は、何か「地球村」の運動会の雰囲気を感じさせました。

即位60年のエリザベス女王が開会を宣言し、五輪旗が会場に運ばれ、続いて聖火を手にした次世代を受け継ぐ７人の若者が駆け込んできました。中央にしつらえられた聖火台に点火すると、炎は輪になってつながり花びらのようになりました。ポール・マッカートニーの「ヘイ・ジュード」で会場は一気に盛り上がり、明日から始まる競技者を力強く後押しするかのようでした。

ロンドンの夜空には、花の聖火に合わせるように、ＥＵの経済危機も一時忘れて、花火が次々に打ち上げられておりました。

今年は８月の暑い夏の夜、「宇宙船地球号（70億人）」の大運動会、オリンピックゲームをあれこれつぶやきながらＴＶ観戦して、私のまわりも盛り上がりました。

陸上トラックの男子100、200メートルは、やはりジャマイカのボルトが圧勝しました。走ることに関しては、断然、黒人勢が強く、陸上トラックを席捲していました。ロンドンマラソンは、古都ロンドンの石畳まじりの市中心部を３回廻るコースでしたが、これも金、銀、銅と黒人勢（金：スティーブン・キプロティク、ウガンダ。銀：アベル・キルイ、ケニア。銅：ウィルソン・キプサング、ケニア）が独占してしまいました。この中にあって、

日本の６位（中本健太郎）は大健闘でした。

今回のオリンピックで日本人の金メダリストは７人でしたが、そのうち４個は、伊調馨（63キロ級・３連覇）、吉田沙保里（55キロ級・３連覇）、小原日登美（48キロ級）、米満達弘（フリースタイル・66キロ級）とレスリングが日本のお家芸となりました。お家芸の柔道は男子の金メダリストは出ませんでしたが、松本薫（女子57キロ級）、野生の切れ味の金は特筆ものです。ボクシング男子ミドル級の村田諒太が終盤で金、体操男子総合の内村航平は前評判通りの鮮やかな演技で中国を抑えての優勝は見事でした。

女子サッカーなでしこジャパンの大活躍は特筆ものです。個人技もさることながら、動く網の目の様に全員がつながり、相手を包み込んで決定打を打つ戦法は日本流で相手には脅威でしょう。優勝決定戦でアメリカをもう一歩のところまで追い詰めた銀は立派なものです。

女子バレーボールの韓国を抑えての28年ぶりの銅もチームワークの良さと現場情報を瞬時にゲームに反映させるややテレビゲーム的な戦法で面白いものでした。

４年に一度のオリンピックは青年たちの肉体の最盛期を誇示するゲームです。オリンピックに二度、三度、四度と連覇することは至難のことで、勝者がやがて敗者になる残酷さがあります。

金メダルを期待されていた北島康介は200メートル平泳ぎで４位になり、後輩の立石諒の銅にも抜かれましたが、これをさわやかにプールで祝っていたのが印象的でした。室伏広治もぎりぎりの精進の結果（銅）を残しました。

他にも数多くの名場面をＴＶ観戦しましたが、身びいきもあり、やり投げの早大生ディーン元気君を応援しました。最終場面にはいま一歩及ばず、残ることができませんでした。次回の2016年リオ五輪では金を狙うとインタビューに答えていたさわやかな元気君には夢をかなえてほしいものです。

ロンドン五輪の閉会式もどんなエンディングかと大いに興味を持ちました。LIVEのＴＶに映し出された舞台の幕開けは、おなじみのビッグベンやロンドン橋のミニチュアを舞台にしたロンドンの日常の一日の始まりでした。朝の街の掃除、車のラッシュアワー、ロンドン子の一日の労働と休息とを表現したと見受けられました。労働者、市民の夜の楽しみは、パブ、そして特別な日には歌と踊りのナイトクラブとなるのでしょう。

2012年ロンドン五輪の最後の夜は、ユニオンジャックの英国の国旗を床一杯に広げて、音楽、歌、踊りの盛大なナイトショーでした。世界の国々、地域地域から４年に一度のオリンピックに国境を越えて集まり、存分に人間肉体の最盛期の躍動を見せてくれました。

選手個々人の満足と残念、次に向けた新しい出発への決意を大きく包み込んだロンドンの夜のフィナーレでした。祭りの仕掛け人、運営者たち、７万人といわれるロンドンのボランティアが選手と一体になって、イギリスの歌や音楽、踊りの夜の大宴会は観客ともども大いに盛り上がっておりました。地球号数億人のLIVEのＴＶ観劇者もついつい引き込まれた一時でした。

2012年、イギリス・ロンドンのオリンピックの設定や運営には、イギリスらしい周到さと構築力を感じます。今回オリンピックの主

会場となったロンドンの東部地区は、20世紀工業の衰退地域で、低所得者層、住民は黒人とマイノリティの多く住んでいる社会的不利が顕在化している地域です。2004年に発表された『ロンドン・プラン―グレーター・ロンドンの空間開発戦略』(註) によれば、

・ロンドン市民の健康
・社会の公平
・イギリスにおける持続可能な開発への貢献

がプランの理念です。東部地区は特に新規開発、再活性化投資のための最優先地区とされ、このためにもロンドン五輪の誘致がなされた経緯があります。オリンピック施設の建設にあたっては、土地、水、エネルギー、建設資源を最大限に持続活用すべしという方針が貫かれたものでした。

オリンピック、パラリンピックが終わった後は、仮設的メインスタジアムを縮小再利用するなど、公共スポーツ施設に転用し、6,000戸以上の新規住宅建設、駅、交通基盤など、公共施設整備のプログラムなどが組み込まれております。

中心部のコンパクトな古都ロンドンの街並みを見せたマラソンコース設定など、都市経営の先進国らしい舞台廻しでした。

２．つぶやき・ツイッターのロンドン五輪

今度のロンドン五輪は、史上初のツイッターオリンピックでした。

４年に一度、204の国・地域から集まった１万人の選手の17日間の熱い競技を、地球の各地からの何億人もの観戦者はまずＴＶ生中継、少し遅れての録画放送、新聞記者たちの現場取材情報によって感動したり共感したりしたことでした。

今回はマスメディアの伝える情報に割って入ったソーシャルネットワークの繋ぐつぶやき、ツイッターが観客と選手の距離をぐっと縮めました。選手は遠隔地のファン、家族、友人、職場、町のコミュニティの個々人と瞬時につながり、つぶやき合うことになりました。感動と共感、残念となぐさめ、応援、感情がリアルタイムでつながり合いました。

情報化時代、秒速で同時多元的に地球の人びとを包み込む電子メディアは地球をますます小さくするようです。

今年のオリンピック開催国イギリスと日本は奇しくもユーラシア大陸の西と東の端の海洋国家です。日本では眠い目をこすりながらのロンドンオリンピックLIVE観戦でした。

この状況において、日本のツイッター、つぶやきの渦には目を見張りました。金メダルのかかったアメリカとなでしこジャパンの女子サッカー決勝では、１分間に３万５千ツイートに及んだと報じられております。

五輪期間中、日本のツイート数は膨大な数です。

・サッカー　300万回
・体操　　132万回
・柔道　　112万回
・バレー　　108万回　　（電通調べ）

ロンドンオリンピックの総ツイート数が全世界で１億５千万回突破は、北京オリンピックの150倍になるそうです。１万人のオリンピック選手が情報素子となってその一瞬の勝負が膨大なツイッターを呼び込み、拡散する新しい構図を今度のロンドンオリンピックはつくり出しました。

それにしてもスポーツは短時間での勝負が

はっきりしており、ツイッター向きです。平和を掲げる五輪競技は脱国家、超国家的で、選手と出身地の家族とコミュニティを現寸的につなぎ合わせるところが興味深い点です。

ロンドン五輪へのソーシャル・ネットワーキング・サービス（ＳＮＳ: Social Networking Service）の参入は、情報革命が一段と進んだことを印象づけました。4年に一度の「宇宙船地球号」のオリンピックは、場所を替えつつますますこの生命体の「平和と持続」への願望の盛大なつぶやき合いになることでしょう。

次期、2016年のオリンピックは南米ブラジル、リオデジャネイロです。ロンドン五輪の閉会式の舞台にブラジル国旗が掲揚される中、IOCロゲ会長からリオデジャネイロのパエス市長に五輪旗が手渡されました。ブラジルは世界の酸素供給地、アマゾンの大森林を有し、リオの都会にはサンバが躍ります。４年後、南アメリカ大陸にどのようなオリンピックが生まれるのか、リオはどんな演出をするのか大いに楽しみです。

ロゴマーク

2012年ロンドンオリンピック

2016 年リオデジャネイロオリンピック

（註）

・『ロンドンプラン―グレーター・ロンドンの空間開発戦略』　ケン・リビングストン編　ロンドンプラン研究会訳　2005年11月　都市出版株式会社

(2012. 08. 20)